

「甘平」の安定生産技術

甘平の平成 21 年現在の栽培面積は 35ha、生産量 77t で、改植・高接ぎ更新が急増している。しかし、夏秋季に裂果の発生（写真 1）が多く、隔年結果がみられるなど栽培上の問題が多い。そこで、露地栽培における気象要因と裂果の関係について解析し、安定生産のためのかん水や摘果方法について検討した。 写真 1 裂果の発生



1 裂果の発生と気象要因

旬単位の積算降水量と平均気温の気象観測データを用いて、5 カ年の裂果率との関係を解析した結果、3 月～梅雨入り前までと 8～9 月の降水量に負の相関がみられ、この時期の降水量が多いと裂果の発生が少なくなる傾向がみられる（図 1）。これは、8～9 月が乾燥した場合強度の水分ストレスがかかりやすく、その後の秋雨で裂果が誘発されるためではないかと推察される。また、9 月の気温との間に正の相関がみられ、気温が高いと裂果の発生が多くなる傾向がみられる。

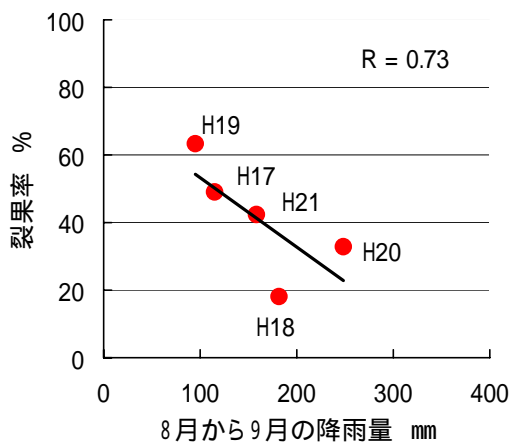


図 1 年次別降水量と裂果率

2 8～9月は少量多頻度かん水

高接 3 年生甘平を供試し、図 2 の処理区を設けて 10 日間隔で 1 樹当たり 100 のホースかん水を行った結果、累積裂果率は 4～9 月実施の春夏かん水で 38% と少なく、7～9 月にかん水未実施

の春かん水区、無かん水区で約 50% とやや多い傾向がみられている。夏秋季の高温乾燥程度が著しい場合は、土壌水分の急激な変化によるかん水直後の裂果発生が多くみられることから、梅雨明け以降は少量多頻度かん水がより効果的と思われる。

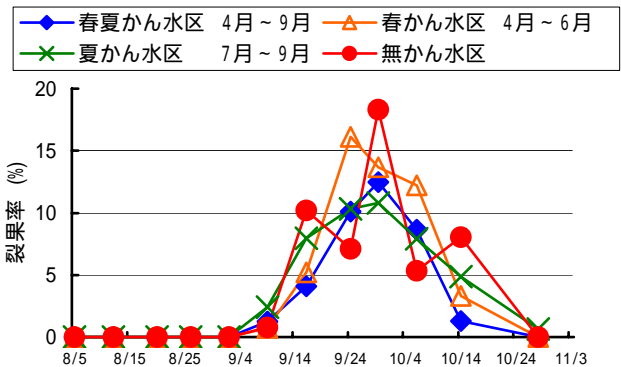


図 2 かん水処理の違いと裂果率の推移 (2009)

3 隔年結果対策

裂果を恐れて無摘果にした樹や着花過多樹は、樹勢が低下して 8 月上旬頃に果実が黄化・落果し、さらには隔年結果を引き起こしている。そこで、適正着果量について検討した結果、仕上げ摘果で 1 m³ 当たり着果数を 15 果以内に制限すると、翌年の生理落果後の着果数は多く、20 果以上成らせると翌年の着花は著しく少なく、特に無摘果樹で顕著に少ない傾向がみられている（図 3）。

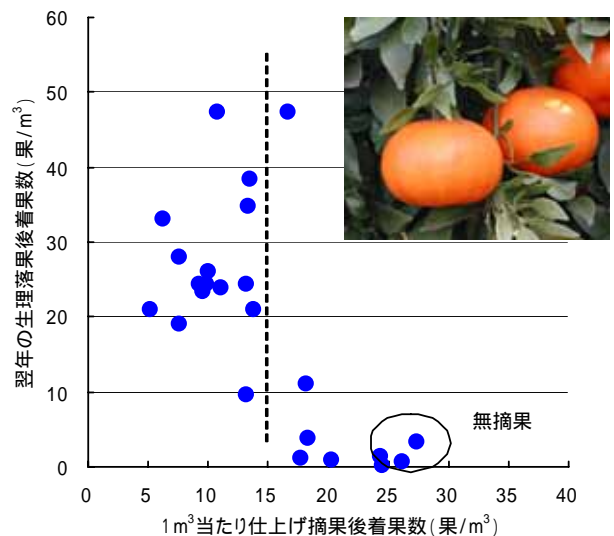


図 3 仕上げ摘果後着果数と翌年の着果量

(施設土壌班 主任研究員 藤原文孝)